

『いい街、こまざわ』

駒澤大学駅の近くにあるスーパーマーケット『えつまる』が『お客様に少しでも休んでいただけるように』と設置してくれていると勝手に思い込んでいるベンチに腰掛けていたとき、ハタケヤマ星人と名乗る存在が声を掛けてきた。

「アホとバカの違いを教えろ」

僕は、嫌だと言った。

そしたら思いっきり殴られた。

彼の指は星屑くらい輝いていたから、これまた美しいなあ、なんて感心しながらも頬の辺りに広がる激痛を味わった。

ベンチから崩れ落ちた僕を見て見ぬふりする歩行者たちの気配を感じて、都会の流れの速さを汲み取って、胸がぎゅーと締め付けられているなあ、と思いふける僕の胸元をぎゅーと締め付けてくるハタケヤマ星人。

この、ダブルミーニングは久しぶりに感性を刺激してくれた。
もう、誰にも邪魔されなくなかった。

僕は全身の力を抜いて世界に身をあずけることにした。このまま、地球の果てまで飛んでいくことはできないのだろうか？ でも、目の前のハタケヤマ星人は僕の気持ちなんて考えずに余韻を奪おうとしてくる。

「おい。アホとバカの違いを教えろ」

僕は、嫌だと言った。

そしたら又、殴られた。

正直、やめて欲しいとも、もっとやってくれとも思わなかった。

彼の星屑が五つ、僕の胸元を握り締めている状態があるだけで、周りの人々の足並みが遅くなるわけでも、突然晴れた空に雲が広がって雨が降るわけでもなかった。信号機は規則正しく赤から青に交互に成り代わっていたし、コンビニエンスストアは二十四時間営業

を継続している。

ハタケヤマ星人が、『これが最後だぞ』とテレパシーを送ってきた後に言葉を放つ。

「アホとバカの違いを教えろ」

僕は懲りずに嫌だと伝えた。

そしたら、ハタケヤマ星人は声を大にしてこう言った。

「じゃあ、駒沢公園で散歩しない？」

僕は、『喜んで！』と言った。

すると、ハタケヤマ星人も大喜びしていた。

肩を組んで歩く僕たちを二度見する歩行者たちを眺めて、『殴られていた時は見て見ぬふりしていたのに』と少し哀しい気持ちが芽生えている。でも、そんなことに構っている暇はなくて、右肩に申し掛かるハタケヤマ星人の星屑の重みをしっかり受け取る方が何よりも大切だった。

駒沢公園の中へ入ると地図がある。

正式名称は、『駒沢オリンピック公園』

広い敷地にはスポーツ施設が備えられていて、数多くの競技場や球技場が存在し、人間たちはそこで野球やサッカー、陸上などの試合や練習をしている。体育館やトレーニングルーム、弓道場、バスケットゴール、テニスコートも兼ね備えてあり、敷地内にはスケートボードの練習場まで設けられている。スポーツ選手を夢見る未来のアスリートにとってはお花畑よりも美しい場所に見えているのだろう。

一方で、駒沢公園には家族連れの人間たちも頻繁に足を運ばせて賑わいを見せている。なぜなら、ここはスポーツ施設だけが備えられている場所ではないからだ。

緑で埋め尽くされた公園内。季節によって色合いが異なり、花が咲いてはお花見お花見。花が散っては寝転び寝転び。年中無休、レジャーシートを引いてまったりゆったりのお花見と……都会の真ん中にあるにもかかわらず、緑を存分に感じられる場所としての役割も果たしているのだ。

くつろぐ大人たちに退屈しない子供たちの為にも、噴水があったり、広場があったり、ドッグランがあったり又、うま公園、ぶた公園、りす公園と三種類の公園が設置されていたり……と、至れり尽くせりな場所でもあるのだ。お日様のもと、家族団らん、だらーんだらーんと日頃のストレスを駒沢オリンピック公園で発散する。マイナスイオンが心を穏

やかにさせてくれて、家族の笑顔がより一層輝いて見えるに違いない。

いい街、こまざわ。

安心安全。いい街、こまざわ！

ジャブジャブ池の近くのベンチでハタケヤマ星人に駒沢公園の魅力を熱弁していた。彼は僕の言葉をひとつひとつ丁寧を受け取って感服しているようだった。

一通り話し終えた後、頬が緩む彼は僕に向かってこう言った。

「ずっと、齒に青のりが……付いているよ？」

手を繋ぎながら駒沢通り沿いにあるバッティングセンターへ向かう僕たちを二度見する人間たち。

ベンチから崩れ落ちた時は見て見ぬふりをしていたのに、とまた少し哀しい気持ちが芽生えてしまった。でも、それはもう過去の話だからウジウジなんて言ってられない。なぜなら、僕は今を楽しむために生きているからだ！

「かむおーん、かむおーん」

八十キロのボールを全身で受け止めているハタケヤマ星人。バッティングセンターに入ったとき、彼は僕にこう言った。

『さっき君を殴った罰を自分に受けさせる』

勢いよく一番左側にあるバッティングエリアに足を進ませて、バットも持たずにホームベースの上に立ってボールを待ち構えるハタケヤマ星人。

僕は彼をしばらく眺めていた。

しびれを切らしたハタケヤマ星人が、『なぜだ？』と訊ねて来た。

僕は、彼の言葉を律儀に受け止めてから、『何をするにもお金が必要なんだよ』と言ってコイン投入口に二百円を入れてあげた。すると、前方にある赤いランプが灯って機械の音が鳴り始めた。

興奮する星屑は、全身に力を込めているようだった。

グリーン。グリーン。と鳴り響く機械がボールを乗せて動いている。三、二、一、シュツ。機械の動力で放たれたボールはハタケヤマ星人目掛けてまっしぐら。時速八十キロと書かれたバッティングエリアのホームベースに立っているハタケヤマ星人の右胸辺りにボールが当たった。

ボコッ……。

威力を失い床に落ちるボール。残り十六球……。僕は、大丈夫？ と訊ねた。すると彼は僕の言葉を素通りして、

「かむおーん、かむおーん」と、次のボールを待っている。

二球目は左胸、三球目は懐辺りにボールが当たった。ハタケヤマ星人は痛がる様子もなく、回を増すごとにアドレナリンでも分泌しているのか、声量も意気込みも段違いにレベルアップしていった。

十七球の快楽を受け終えたハタケヤマ星人が姿を現した。僕の姿を見つけるや否や開口一番、『途中で止めるのがセオリーやろっ』と文句を垂れてきた。

瞬間的にイライラしてしまったがすぐに心の中で、『彼は今アドレナリンが分泌されているから少しは大目に見てやるか』と穏便に済ませるために体内で感情を交換させてやる。そして、『ごめん。何球目くらいに止めれば良かったかな？』と柔らかな表情を装って訊ねた。

彼は少し考えてから、『七、八球目くらい？』と文句を垂れた割には自信がないのか、それともセオリーなんてそんなものの初めからなかったのか、弱々しい口調で言葉を放った。

僕の心は彼の態度を、『可愛らしい』と感じたようで、彼の身体を優しく包み込んでから、『ごめんね。次からは気をつけるね』と耳元で囁いた。

僕の身体からそっと離れたハタケヤマ星人は何も言わずに僕の額にキスをした。そのとき、思った。さっき出会ったばかりの相手とキスをするなんて淫らなんだ……。と。駄目なことをしていると頭では分かっているのに、歯止めがきかなかった。気づいた時、感情の赴くままに言葉を放っている。

「今から、家こない？」

自宅にあるプロジェクターで映画を見ていた。

黒いソファに二人で座って、コンビニエンスストアで買ったキャラメルポップコーンと炭酸飲料を机の上に置いている。バツティングセンターから戻る途中、『船が沈没する、あの有名な映画が見たい』とハタケヤマ星人が言うもんだから僕は、『それ以外を見ようね!』と優しく微笑んだ。

彼は、『分かった。スター・ウォーズで我慢する』なんて言うもんだから僕は、『スター・ウォーズ、見たことないの?』と、訊ねると、『一度もない』と言った。僕は彼の頭を撫でてから、『仕方ないなあ。じゃあスター・ウォーズを見ようね』と言って二人で近くのビデオショップへ足を運んだ。

『スター・ウォーズ、エピソード八』を鑑賞していた。正直、彼は意味が分からないみたいだ。

昨日、エピソード七を見終えたところだったからどんどん話が入ってきて前のめりになってしまう僕の隣でつまらなさそうにしている彼の様子を感じておきながらも知らないふりをして画面に釘付けた。キャラメルポップコーンを食べる音が耳障りだと思ったが、仕方がない……お互い様だ! と自分に言い聞かせてやった。

一時間が過ぎた頃、鑑賞する氣力を失ったハタケヤマ星人は僕の肩に頭を乗せてきた。『可愛いなあ』と感じながらも、画面から目を離さなかった。

初めのうちはちょっかいを掛けて氣を引こうとしていたハタケヤマ星人だったが、僕にその氣がないと知ると潔く黒いソファから離れて腕立て伏せをし始めた。同じ空間に居るのに各々違う目的を全うする。この関係性はとても素晴らしいと学んでしまった。

エンドロールが流れて、拍手をしている僕の隣でハタケヤマ星人はスヤスヤと寢息を立てながら眠っていた。腕立て伏せをして疲れたのだろう。眠っている表情を見ると愛おしさが溢れ出して、居ても経っても居られなくなってしまった僕は、彼の額にそっとキスをした。

眠っている彼を起こさないようにゆっくりと動いて、近くに転がっていた白い紙とボールペンを手に取り、『すぐに戻ってきます』と書置きを残して外へ出た。

駅から徒歩一分くらいの場所に「カフェ・ライスイー」がある。

イトインもテイクアウトも出来るお店。僕はここの日替わり弁当が大好きだ。生姜焼き、ロースカツ、ポークステーキ、タコライス。日替わりのメインディッシュも魅力的なのだが、それよりもっと魅力的なものがある。サイドメニューで付いてくるお惣

菜の種類が豊富なのだ。ゴーヤの佃煮、キムチ、ナスのお浸し、玉子焼きなどなど、一つのお弁当に七種類八種類もの惣菜を使うお弁当がこの世に存在するのか。と初めて頼んだ時の衝撃を今でも覚えている。メインディッシュが無くてサイドメニューだけで充分お腹が満たされる。心も満たされる。ふんだんに使われているお野菜の数々。味付けも僕好み。お店の雰囲気も素敵です。もちろん、店員さんも素敵です。

スター・ウォーズを観ている途中、ふと思いついた。

『あそこのお弁当をハタケヤマ星人と一緒に食べたい』

自分が好んでいるものを共有して共感して欲しいと思ったのだ。だから僕は眠る彼を驚かせるためにカフェ・ライスィーへ向かったのだ。

「お待たせしました、日替わり弁当お二つです」

「ありがとうございます」

目を見てお礼を言った。

僕は、ビニール袋に入ったお弁当を二つ頂いた。ウキウキして階段を上っていく。お尻がフリフリ動かしていたのを見られてしまったかもしれない。でも、そんなの気にしない。近くの自動販売機でお水を二つ買ってハタケヤマ星人が眠る自宅へと足を運んだ。

「ただいま」

おかえりって言われないのは少し寂しい。

まだ眠っているのだろう、と思った僕は、音を立てないように玄関の扉を閉めた。喜んでもらいたいと思う気持ちと、初対面なのに何してるんだろうと思う気持ちと、人生一回きりなんだから思ったことやればいいじゃん！と思う気持ちなどが合わさって僕の胸は高鳴っていた。

人間はどうして自分を抑えて生きるのだろうか？

不意に問いただしてくるもう一人の自分に耳を貸した僕は、その場に立ち尽くしてしまいくさになる。でも、今は楽しめよ？とすぐに違う自分が現れて背中を押してくれた。

『あとで独りの時に考えな』

肯いた僕は、ハタケヤマ星人の笑顔を見るために部屋の中に進んでいく。彼は、どこにも居なかった。

部屋中をどれだけ見渡しても居なかった。

寝息も聞こえてこないし、眠ってもいなかった。全部、夢だったのか？　と試してみるけど、飲みかけの炭酸飲料と食べかけのキャラメルポップコーンは机の上に置かれたままだった。ビデオショップで借りた『スター・ウォーズ、エピソード八』も存在している。

唐突に、ハタケヤマ星人に胸を締め付けられた感覚が蘇ってきた。

肩を組んだ感覚や、手を繋いだ感覚。

お弁当を食べて欲しいと思った感覚。

確かに、隣に居たはずなんだよ！

僕は、困惑した。

お弁当、二つも食べられないよ。

気が付くと、書置きした白い紙を見つめていた。自分の書いた文字とは異なる文字が書かれている。

僕は、ビニール袋を手放して書置きの紙を手にとった。

『もうすぐ暗くなるから帰るね。夜はどうして暗いのだろう？』

名前も知らないハタケヤマ星人は、僕の知らない場所に帰っていった。

頭を振って全てを忘れ、机の上にお弁当を二つ、丁寧に並べる。

両手を合わせて、『いただきます』と言ってからボリウム満点のお弁当に手を付け始めた。

「やっぱり……美味しい」

ふいに、ハタケヤマ星人が着ていたTシャツのプリントを思い浮かべて吹き出しそうになりながらも、黙々と、美味しいごはんを口の中へ放り込んでいく。